

第 2 回  
「北方領土と私たち」作文コンクール  
入賞作文集



(北方四島青少年交流訪問受入事業での意見交換会)

北方領土返還要求京都府民会議  
京都府北方領土教育者会議

# 目 次

1	発刊にあたって .....	1
2	実施要項 .....	2
3	選考について .....	3
4	入賞者一覧 .....	4
5	授賞式風景 .....	6
6	受賞作文 .....	7

## 最優秀賞

京都府知事賞	京都府立洛北高等学校附属中学校	村 上	花
京都市長賞	京都市立堀川高等学校	藤 田	紫 穂

## 優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	宮津市立日置中学校	矢 野	宗一朗
京都市教育委員会教育長賞	京都市立藤森中学校	木 村	杏 奈
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立嵯峨中学校	山 田	恵 万
北方領土問題対策協会理事長賞	京都府立園部高等学校	杉 尾	美 聡
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立八条中学校	小 池	莉 子
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	綾部市立豊里中学校	林	明日香
京都新聞社賞	京都市立嵯峨中学校	山 本	理 沙
京都新聞社賞	京都府立鳥羽高等学校	秦	秀 平
K B S 京都賞	城陽市立東城陽中学校	金 井	せりえ
K B S 京都賞	南丹市立園部中学校	日下部	美 紀

佳 作	京都市立藤森中学校	河 崎	かれん
佳 作	京都市立弥栄中学校	岸	愛
佳 作	京都市立高雄中学校	山 本	涼 加
佳 作	京都市立深草中学校	永 井	智 大
佳 作	京都市立塔南高等学校	高 橋	沙也理
佳 作	城陽市立城陽中学校	大 倉	萌
佳 作	向日市立西ノ岡中学校	一ノ瀬	麻 依
佳 作	亀岡市立大成中学校	下 岡	拓 矢
佳 作	京丹波町立蒲生野中学校	河 崎	愛 実
佳 作	宮津市立養老中学校	土 井	彩哉香
佳 作	京都府立洛北高等学校	竹 中	朝 美

## 発刊にあたって

「北方四島は、京都の話題でわいていた。」  
これは、ビザなし交流で国後島を訪れた共同通信の記者が伝えてきた現地の様子です。

平成十九年六月、北方四島に在住するロシアの青少年や教育関係者三十六名が、相互訪問交流として京都を訪れました。京都府立園部高等学校並びに京都市立洛東中学校が快く受け入れていただき、授業や日本文化の体験、意見交換などを通じた交流がなされました。世界に誇る日本の文化を目の当たりにしたロシアの青少年が、京都訪問の率直な思いを記者に語ったものと思われます。このこと一つをとらえても、相互訪問交流が果たした役割の大きさを伺い知ることができます。今回の交流から学んだのは、ロシアの青少年だけではなくあります。共に交流をした日本の中学生や高校生も同様に多くのことを学んだと聞いております。また八月には、近畿ブロック北方領土少年少女研修会が、六年ぶりに京都を会場に開催され、百二十名を超える参加があり、北方領土に関する学習気運が高まりました。こうした事業と並行して取り組みました「北方領土と私たち」作文コンクールは、本年度二回目を迎え昨年度を大きく上回る八百九十五点の応募をいただきました。今回の応募作品は、前回に多くみられた北方領土問題の歴史的経過を主題にしたものに加え、北方四島の豊かな自然環境を扱ったもの、漁業等の経済問題を扱ったもの、相互訪問交流から学んだもの、北方四島に残る日本人墓地問題など元島民にかかわる問題を扱ったもの、さらには領土問題解

決のための具体的な方法を論じたものなど多岐にわたっています。これは、北方領土問題に関する幅広い学習が応募作品に反映したものであり、北方領土教育が進みだしたことの証左と喜んでおります。

このように、北方領土問題への学習が広がりをみせ、本作文コンクールの定着が進みましたのは、各学校の御理解と御協力の賜物と心より感謝申し上げます。併せて、本作文コンクールに御後援をいただきました独立行政法人北方領土問題対策協会・京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会・京都新聞社・KBS京都をはじめとする関係機関の皆様方にも深く御礼申し上げます。

日本とロシアの政府間交渉が膠着し、北方領土返還をめぐる状況は一層難しい局面を迎えており、それだけに次代を担う青少年の北方領土問題への認識と関心を高めることが一層重要になってきております。今後とも関係の皆様方の御指導と御支援をお願い申し上げます。発刊の言葉といたします。

平成二十年二月二十三日

北方領土返還要求京都府民会議

会長 栗田澄子

北方領土問題京都府教育者会議

会長 松本和久

## 第2回「北方領土と私たち」作文コンクールの実施要項

### 1 趣 旨

京都府内の中学生や高校生が、北方四島の現実に関心を高め、北方四島が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解することを目的として実施する。

### 2 主 催

北方領土返還要求京都府民会議  
京都府北方領土教育者会議

### 3 後 援

京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会  
独立行政法人北方領土問題対策協会・京都新聞社・KBS京都

### 4 テーマ

「北方領土と私たち」にかかわる内容であること（題名は自由）

### 5 募 集

(1) 対 象 京都府内の中学校・高等学校に在学している者  
(2) 募集締切 平成19年11月30日（金）  
(3) 作品規定 原稿用紙（400字詰）3枚以内  
(4) 応募先 「北方領土と私たち」作文コンクール事務局

### 6 審 査

主催者において選定した審査員により審査

### 7 表 彰

#### 最優秀賞 2点

- ・京都府知事賞
- ・京都市長賞

#### 優 秀 賞 10点

- ・京都府教育委員会教育長賞
- ・京都市教育委員会教育長賞
- ・独立行政法人北方領土問題対策協会理事長賞
- ・北方領土返還要求京都府民会議会長賞
- ・京都新聞社賞
- ・KBS京都賞

#### 佳作・入選 若干点

※ 選考委員会からの提言を受け、優秀賞の点数を増やすと共に「佳作」の賞を新たに設けることとした

## 第2回「北方領土と私たち」作文コンクールの選考について

### 1 応募の状況

応募点数	895点	(中学校 681点	高等学校 214点)
応募校数	25校	(中学校 20校	高等学校 5校)

### 2 選考委員会の開催と選考基準

#### (1) 選考委員会

- ・日 時 平成19年12月19日(火) 午後3時30分～
- ・会 場 「京都府公館」

#### (2) 選考委員会の構成

氏 名	所 属 ・ 役 職
能 登 英 夫	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
西 村 英 二	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
中 西 和 之	北方領土返還要求京都府民会議幹事 (京都府埋蔵文化財調査研究センター常務理事)
綾 城 義 治	京都府広報課府民広聴室課長補佐
矢 田 部 衛	京都市総合企画局政策調整課担当係長
松 本 和 久	京都府北方領土教育者会議会長 (京都府南丹教育局総括指導主事)
島 本 由 紀	京都府北方領土教育者会議副会長 (京都市教育委員会首席指導主事)
西 田 三 郎	京都府北方領土教育者会議運営委員 (南丹市立園部中学校教頭)
福 森 徹 也	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市立藤森中学校教諭)

#### (3) 選考基準

- ・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。  
(正しい認識・理解の視点)
- ・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。  
(主体的な態度・関心意欲の視点)
- ・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、あるいは取り組もうとしているか。  
(将来への展望の視点)
- ・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。  
(啓発資料としての価値の視点)

### 3 選考の結果

別紙の入賞者一覧のとおり

### 4 選考を終えて

- ・ようやく2回目を迎えたが、昨年に倍する応募をいただき、コンクールが一定の広がりを見せることができた。これも、関係機関並びに各学校と先生の御理解と御協力のお陰であり、感謝をしたい。
- ・作文の内容をみると、学校での授業などを反映しさまざまな角度から北方領土問題を取り上げたものが多く、北方領土問題に対する理解の広がりや関心の高まりがうかがえる。
- ・作文コンクールが契機となり、学校における北方領土問題に関する授業や指導が展開され、生徒への北方領土問題に対する啓発がなされたことの意義は大きいものがある。
- ・今回、予想をこえる応募点数のうえ、優れた作品も多く見られたので、当初の表彰数を見直し、できうる限り多くの表彰機会がとられるよう期待したい。

## 第2回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

氏 名	学 校	学 年
最優秀賞（京都府知事賞）		
村 上 花	京都府立洛北高等学校附属中学校	2 年
最優秀賞（京都市長賞）		
藤 田 紫 穂	京都市立堀川高等学校	2 年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
矢 野 宗 一 朗	宮津市立日置中学校	2 年
優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）		
木 村 杏 奈	京都市立藤森中学校	3 年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
山 田 恵 万	京都市立嵯峨中学校	3 年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
杉 尾 美 聡	京都府立園部高等学校	2 年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
小 池 莉 子	京都市立八条中学校	3 年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
林 明日香	綾部市立豊里中学校	3 年
優秀賞（京都新聞社賞）		
山 本 理 沙	京都市立嵯峨中学校	2 年
優秀賞（京都新聞社賞）		
秦 秀 平	京都府立鳥羽高等学校	3 年
優秀賞（KBS京都賞）		
金 井 せりえ	城陽市立東城陽中学校	2 年
優秀賞（KBS京都賞）		
日下部 美 紀	南丹市立園部中学校	2 年

## 第2回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏 名	学 校	学 年
佳 作	河 崎 かれん	京都市立藤森中学校	3 年
	岸 愛	京都市立弥栄中学校	2 年
	山 本 涼 加	京都市立高雄中学校	1 年
	永 井 智 大	京都市立深草中学校	1 年
	高 橋 沙 也 理	京都市立塔南高等学校	2 年
	大 倉 萌	城陽市立城陽中学校	3 年
	一ノ瀬 麻 依	向日市立西ノ岡中学校	1 年
	下 岡 拓 矢	亀岡市立大成中学校	2 年
	河 崎 愛 実	京丹波町立蒲生野中学校	3 年
	土 井 彩 哉 香	宮津市立養老中学校	3 年
	竹 中 朝 美	京都府立洛北高等学校	2 年
入 選	川 岡 智 恵	京都市立嵯峨中学校	2 年
	青 木 祐 子	京都市立堀川高等学校	2 年
	小 嶋 美 貴	京都市立堀川高等学校	2 年
	水 田 有 哉	向日市立勝山中学校	3 年
	中 川 勇 人	亀岡市立高田中学校	1 年
	前 田 望 未	南丹市立八木中学校	1 年
	向 井 歩 美	南丹市立殿田中学校	3 年

## 最優秀賞などの表彰式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の表彰式  
平成20年1月28日 京都府庁



小石原範和京都府副知事、勝間喜一郎京都府教育委員会教育次長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育委員会教育長賞の表彰式  
平成20年1月23日 京都市役所



上原任京都市副市長、高桑三男京都市教育委員会教育長職務代理（教育次長）から賞状が授与されました。

入 賞 作 品

## 最優秀賞（京都府知事賞）

### 国民が考えるべき北方領土問題

京都府立洛北高等学校附属中学校

二年 村上 花

「もつとはつきり見たかった。霧がかかっていたからね。でも近いね。貝殻島は。」

最近、私は北方領土について、一冊の本を読みました。これは、その本に書かれていた言葉です。2004年、当時の小泉純一郎首相が、北方領土の視察をした後の一言だそうです。これが、日本の首相として自国の領土を見に行った後の感想だと言えるでしょうか。日本の領土なのに足を踏み入れることができず、もつとはつきり見たかったと言っているのです。おかしいと思いませんか。本来なら、

「来てよかった。」

「きれいだった。」

などと感想を述べるところでしよう。あるいは、小泉元首相がわざわざ行く必要もなかったのかもしれませんが、なぜ、こんな当たり前のようなことができなんでしょうか。私には不思議でたまりません。

北方領土問題は、戦争が残っていた問題です。この問題解決は、戦争が終わり平和になった現在でも日本に課せられています。そして、私には、北方領土の領有権を問うにとどまらない、もつと大きなもののような気がするのです。

たとえば、今でも北方領土には、日本人の墓があります。しかし、ほとんどの墓が風化してしまい、残っているものは数少ないと聞きます。それも手入れがされていないため、土に埋もれて無惨な姿だそうです。これが、領土問題の大きさを物語っています。

現在、北方領土問題で、誰が一番辛い思いをしているのでしょうか。それは、日本の政治やロシアの政治を動かす人ではありません。本当に無念な思いでいるのは、元島民だと思います。ずっと暮らしていた土地から追い出され、戻ることができないのです。家族の墓もあつたでしょう。それがお参りも限られ、その土地は完全に他の国に占領されているのです。こんなことがあってもいいのでしょうか。私が今住んでいる所から急に追い出されたら辛いです。辛くない人はいないと思います。また、元島民の方は高齢となり、残された時間も多くないのが現状です。

私は、社会科で学習をするまで、北方領土問題について全く知りませんでした。興味ありませんでした。それが問題です。日本人は、北方領土問題についてあまり興味がなく知ろうともしないのではないのでしょうか。背景には、北方領土問題に関する情報が、私たちに届きにくい現状が考えられます。国民も知るべきだし、政府ももつと知らせるべきです。多くの人々が北方領土問題について考えることから問題解決は始まると思います。もつと北方領土問題について知り、早く返してもらおうことを願っています。大切なことは、自分には関わりがないと思わないことです。私は、このことを頭において、これから学んでいきます。

## 最優秀賞（京都市長賞）

### 北方領土と私たち

京都市立堀川高等学校

二年 藤田 紫穂

北方領土問題といっても、今まで私は教科書に載っている程度の知識しか無かった。そこで、この作文をきっかけに、北方領土問題について調べてみることにした。

すると、今の北方領土が置かれている状況や、領土が返還されない流れを見ていくうちに、何だか腑に落ちない問題だな、という思いがだんだん大きくなっていった。

北方領土は歴史的事実からみても、国際法上の根拠からいっても、返還要求をしてもおかしくない。北方四島は、一度も外国の領土になったことがない日本の固有の領土であるにも関わらず、第二次世界大戦終了直後、ソ連により不法に占拠され、日本人の住めない島々になってしまっている。一度、択捉島に残っている日本人が建てた郵便局の写真を見たことがある。戦後、日本人が建設した建物は次々と取り壊されたというが、このように日本人が北方領土に居住していたという象徴が無くなっていくのは、とても悲しいことだと調べる中で感じた。

このようにして、どこか遠い話だと思っていた北方領土問題が、私にはだんだん身近な問題になってきた。よく思い出してみると、私の住む街の駅にも北方領土の返還を強く求める標語の書かれた碑があった。こんなに離れている

京都の街にも、北方領土問題が関わっていることを知った。そこで、京都府と北方領土、京都人と北方領土の関わりについて調べていくと、意外なところに接点があることもわかった。京都府の花にも指定されている、しだれ桜である。

京都には、佐野藤右衛門という古くから植木、造園業を営む家があり、当主は代々藤右衛門を名乗っている。その中でも、第十四代藤右衛門は、晩年に全国の桜を訪ね歩いて名木の種子を集めた。その彼の心を強くとらえたのが、北海道の桜であった。さらに十五代藤右衛門は国後、択捉、樺太に渡って千島桜を調べ、苗木を収集したという。そのときの国後種の千島桜も佐野家の苗圃で育っているとい、現当主の第十六代藤右衛門も北海道に毎年渡って千島桜の調査を進めているそうだ。普段身近に接しているしだれ桜の中に、北方領土から採植されたものがあると考えると感慨を抱く。

日常生活にも深く関わってくる北方領土問題。北方領土の返還を実現するには、やはり身近な場所から地道に声をあげていくしかない。そして、幅広い年齢層の一般市民が意見を交流し、一人でも多くの人に呼びかけて協力をはかっていることが大切だ。各個人の北方領土への意識が高まっていくけば、それがいずれ世論となり、問題を大きく変えていくかもしれない。一日も早く、北方領土が日本に返還されることを願っている。

## 優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

実は知らない

宮津市立日置中学校  
二年 矢野 宗一郎

「情けないなあ。」

北方領土に関して、僕はまったくの無知です。知っていることといえば、本来、日本の領土のはずなのにロシアが占領しているということと、その島々は、すべて北海道の近くにあるということぐらいです。

日本人なのに、日本の領土問題について何も知らないという無関心であつた自分が嫌になりました。しかし、北方領土問題について知らない人は僕だけでしょうか。実際に聞いてみたわけではないので本当かどうかわかりませんが、北方領土のことについて知らない人は他にもいると思います。「自分は知っている。」と言いながら僕みたいに、実はあまり知らないという人も多いと思います。

僕は、社会の授業で北方領土問題について勉強して、さまざまなお話を思いました。まず、日本の人はもちろん「北方四島を返せ」と言っています。ロシアの人はどう思っているのかが出てこなかったのです。すごく気になりました。

そしてもう一つ気になったのが、なぜロシアは四島を占領したのか。このことを調べていると、北方領土の周辺には漁業をするにはとてもよい場所があり、年間何十億もの生産高が出てると書いてありました。こんなに都合のいい話だったら、ロシアも北方領土を手放したくないでしょう。ロシア側にして

みたら、もし北方領土が日本のものになると、何十億もの損失が出て経済的に苦しくなってしまう。だから、こういう理由などもあり、北方領土を日本に返したくないのかなと思います。

しかし、日本には当然返還を求める根拠があります。まず、北方四島は日本が早く早く開発し、住んでいたということ。つまり日本固有の領土であること。また、日本は第二次世界大戦に負け、サンフランシスコ条約を結び、千島列島を放棄しましたが、日本が思う千島列島は北方四島を含んでおらず、北方四島も放棄したのではないと資料にありました。他にも、いろいろとたくさん根拠があります。

では、北方領土問題の解決をどう考えたらよいのでしょうか。領土問題はどうしても自分の国の事だけを考えてしまいますが、ちよつと視線を変えて違う角度から見ると、何かいい方法に気がつくかもしれません。他の国では、領土問題で戦争を起こしてしまつたということを聞いたことがあります。だからそうならないように、平和に話し合いで解決を目指して欲しいです。

日本には日本の根拠があり、ロシアにはロシアの理由があります。だから、この問題を解決するには、両国の国民がお互いことを十分に理解することがなくてはなりません。

前にも書いたように、あまり多くの人が北方領土問題について知らないのです。日本国民一人一人がしっかりと考え、解決に導いていかなければならないと思います。そのためには、まず僕たちが、日本が返還を求める根拠をしっかりと学ぶことと、ロシアの理由にも耳を傾けることが大切だと思います。

## 優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

どちらの北方領土？

京都市立藤森中学校

三年 木村 杏奈

北方領土とは、日本の北東端に位置する歯舞諸島、色丹島、国後島、択捉島のことである。北海道にとっても近い島なのにロシアに占領されているのは、いったい何故だろうか。

江戸時代の初めごろから、北方領土に住んでいたアイヌの人々と交流を始めた。その後、南下するロシアの力が増してきたので幕府はそこを開拓した。そして一八五五年、南下を続けるロシアと下田で「日露通交条約」を結んだ。これは、択捉島から南の島々は日本の領土とし、またウルップ島から北の島々をロシアの領土とした。つまり、もとを辿れば日本の島であるのだ。時代とともに開拓が進み人口も増え、第二次世界大戦が終わったときには、二万人近くの日本人が暮らしていたそうだ。しかし、第二次世界大戦が終わった一九四五年の八月から九月にかけて、日本が降伏という考えを明らかにしているのにロシア（当時はソ連）は北方領土を占領していったのだ。現地に住んでいた人々は強制的に樺太などでとてつもなく苦しい生活を送らされ、一九四七年ごろ引き上げられたものの北方領土には日本人ではなくロシア人が暮らしているのである。

わたしは何故北方領土が占領されているのかを知ってすぐく腹が立った。昔にちゃんと条約を結んでいるのに理由なく占領するなんておかしいと考えるからだ。昔の条約だからといって約束を破ってよいはずがないと思う。北方領土が「日本固有の領土」と呼ばれる理由もこれでわかる。第二次世界大戦中、一九四一年に日ソ中立条約を結んでいることは前に習っていたのだが、ソ連はこの条約も破り日本へ攻撃をしかけている。とてもずるいやり方であり、わたしはこういうのは大嫌いだ。しかし、約束破りと同じくらい嫌いなことがある。それは「ケンカ」である。ロシアは日本には仲良くなってももらいたいと心から願っているのだ。このままでは、両国とも北方領土問題解決まで一歩も進められず、仲はどんどん悪くなっていくだろう。わたしが考えるのは、もうどちらの領土かはつきり割ってしまったのは難しいと思うので、両国とも領土とすることだ。しっかりと歴史を辿れば日本の領土とわかるが、島ではロシアの人々が暮らしている。この人たちを追い出すなんて不可能だし、どちらも絶対に自分たちの領土であるという主張を曲げることはないだろう。わたしの考えは何の解決にもならないかもしれないが、協和も大切だと思うのだ。日本とロシアが領土が原因で険悪な仲になってしまっているのなら、領土のおかげで一段と交流が深まることもできるのではないだろうか。

## 優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

私たちが解決の担い手に

京都市立嵯峨中学校  
三年 山田 恵万

北方領土問題は、日本とロシアとの政治的な問題や元島民の日本人の方たちだけの問題では決してありません。私たち自身の問題です。

日本がロシアより早く北方四島の存在を知り、開拓を進め統治を確立しました。その択捉島、国後島、色丹島、歯舞諸島の四島は一度も外国の領土となつたことのない日本固有の領土です。

しかし、第二次世界大戦末期、日本がポツダム宣言を受諾し降伏の意図を明確に表明した後、ソ連軍は北方四島に侵攻し、日本人島民を強制的に追い出したのです。そして、一方的にソ連領に編入し、ソ連崩壊後の現在もロシアによって不法に占拠されたままです。

私が、北方領土問題の重大さを実感したのは、本年八月に北方領土問題対策協会主催の「北方領土交流事業」で択捉島を訪れたときのことです。択捉島は、自然環境、海産物、天然資源に恵まれたとても豊かな島です。しかし、ロシアに不法占拠されているため、日本はその豊かな資源を活用することができず大きな損失を受けています。また、元島民の日本人の墓地は雑草が生い茂り、とても悲しく寂しさを感ぜずにはいられませんでした。

悲惨な戦争の結果、ふるさとの島が理由もなく不法に奪

われたままであるため、自由に帰ることができず、墓参りをしたくてもできない状況にあります。とてもつらく、悲しい現実です。

そのため、北方領土問題の解決を目指して「北方領土の日」や「北方領土返還要求全国強調月間」が設けられており、活発な啓発活動が展開されています。また、「ビザなし交流」が行われるなど、全国的に様々な返還要求運動が進められ、それらの事業は着実に成果を上げているところ

です。

しかし、その反面、戦後六十年以上経った今、北方領土問題が風化し、忘れ去られようとしてはいないでしょうか。北方領土問題の一日も早い解決のためには、私たち一人一人が北方領土問題について正しく理解し、認識を深めること、そして、自分自身の問題として考え、たとえ小さなことからでも行動していく必要があると思います。また、私が択捉島を訪れたとき、言語も生活習慣も文化も異なるロシアの人たちであっても互いに理解を深めることができました。そして、心から友好の輪を広げることもできました。このように日本人とロシア人が相互理解を深め共に歩んでいけば、必ず解決できる問題だと強く思います。

これから、これまでの返還運動などの取り組みをさらに発展させ、私たち若い世代で北方四島に新しい風を吹かせたいと思います。北方領土問題の解決の扉を大きく開けるために、自分自身の問題として、初めの一步を踏み出さなければならぬと思います。

## 優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

### ビザなし交流から考えた北方領土問題

京都府立園部高等学校  
二年 杉尾 美聡

「北方領土」というと、知っているようで知らない部分がたくさんあると思う。昔からずっと日本とロシア（昔のソ連）がもめていて、今でも解決されることなく引きずっている。自分の国が関わっている問題でありながら、直接関わりがないという理由で、そんなに詳しく知らなかったし深く知ろうともしなかった。それはきつと、自分が生まれる前からある問題だし、難しそうな話しだからという考えが私の心の中のどこかにあったと思う。

けれども、今年の6月、日本とロシアの政府の間で行われているノービザ交流のひとつとして、北方領土から私たちと同世代の青少年たちが、私が通う園部高校に来校された。それがきっかけで、今まで私が考えていたことが大きく変わった。それは、今まで国の問題であると思っていたことが、今回、北方領土に住む人たちと関わることで、私が直接関わることでできる国際問題のひとつになったからだ。

彼らの来校が決まり、交流のための事前学習で北方領土の歴史や、他の国際問題と比較して、共通することや独自の問題点など学習した。そしてお互いの文化を紹介しあうために、ロシア語会話や花笠音頭などの練習もした。だから交流する前は、もちろん楽しみという気持ちもあつたけれど、その一方で、言葉が全く通じない人たちとどうやって交流して話をすればいいんだという気持ちもあつた。だけど、実際交流をしてみると、自分が予想していた以上に楽しく、深く交流できた。特に、グループに分かれて討論をした時は、すごくよい交流ができたと思う。お互いの学

校のこと、流行っている歌、ファッションなど、すぐ踏み込んだ討論ができた。討論が終わってから、食事会の時に英語を使って質問しあったり、メールアドレス交換をしたりする人もいて、本当に素晴らしい交流ができた。何ととっても、北方領土の青少年たちは、日本に対してとても興味があり、今回の交流に関してもすごく積極的だった。そのおかげで、私たちの心も和んで、予想以上の良い交流ができたと思っっている。

でも実際のところ、北方領土問題という政治的な問題については、深く話すことはできなかった。チャンスがあれば話をしようと思っっていたが、出会ってまだ間もないことや、まだ私の心の中には、国どうしの難しい話だという概念が強く、この話についてはあまり踏み込むことができなかった。たぶん、彼らもこの問題が出るのではないかと心配していたのかもしれない。しかし、私たちがした、このような交流の積み重ねが、国どうしの話し合いを動かす力になるのだと思っただし、このような機会を何度も持つことで、より親しくなり、北方領土問題について話し合う機会がそんなに遠くない将来にあつてもいいのではないかと思っいました。

今回の交流を通じて、北方領土問題なんて私には関係ない、どこかで思っっていた気持ちもなくなり、すごく興味を持つようになった。両国の政府が抱えている難しい問題かもしれないけれど、私たちはそういう問題を意識しながらも、気軽に交流ができたことはすごいことだと思っ。私たちのしたことは、日本とロシア両国政府の間で行われていることに比べたら小さなことかもしれない。でも、このような小さなことをコツコツ積み重ねていくことは、お互いの交流の発展につながる。そして率直な気持ちを話し合う機会が増えれば、北方領土問題が平和的に解決するだろう。そのためにも、私たちのした経験を広く伝えることは、問題解決の大きな原動力になるのだと信じている。

## 優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

### 受け継ぐべき領土

京都市立八条中学校

三年 小池 莉子

私は毎朝、新聞に目を通す。細かい記事を読む余裕はないが、大きな見出しや広告などは見ておく。その日の出来事や世の中の流れを大まかに把握できるからだ。今年の二月の京都新聞の朝刊の広告に「北方領土の日」と出ていた。地図と共に「北方領土は日本固有の領土です」と書かれていたと思う。

小学校の社会科で少し学んだので、何となく注目した。今思えば、私が知らなかっただけで、その広告は毎年「北方領土の日」に新聞に載っているのかもしれない。北方領土が日本の領土であることを国民が忘れないように。

戦後六十年以上経った今も返還されずに、日々変化していく世の中の動きとは別に、ポツンとそこに取り残されているような寂しさを感じた。その間にソ連は民主化してロシアになった。

それに、返還された後のことも考えなければならない。

既に定住しているロシア人も多いと聞く。ニュースで見たが、日本のテレビの電波も届くので、その人たちは日本語や日本の文化もよく知っていた。そんなロシアの現住民を日本の領土だからといって追い出すのではなく、共存・共生していく環境を作っていくべきだろう。そうすることが国同士の平和な安定につながると思う。

また、恵まれた豊かな自然も壊してはいけない。たくさんおいしい魚がとれて漁業が元気になれば、自給率も上がり食生活もかわる。森林資源や手つかずの自然は、決してリゾート開発などせずに世界遺産に登録されるようになれば、何より国の宝となるだろう。

本当の意味での、手をのばせば届くお隣さんのロシアとは、経済や文化の交流が自然に発生していくだろう。一日も早く、それが実現すれば良いと思う。そして、小さな島国である日本の遠い北の小島である「北方領土」は日本人の祖先の人たちが開拓した、私たちが「受け継ぐべき領土」であることを忘れずにいよう。

## 優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

### 北方領土問題の解決に向けて

綾部市立豊里中学校

三年 林 明日香

今日、「北方領土」についてのビデオを見る前にも、日本とロシアの間には、未だ解決されていない問題があることは知っていました。元は日本固有の領土なのに、1945年、ソ連が不法に占拠して、もう62年が経ちます。その間にも、日ソ共同宣言が署名されたり、日ソ首脳会議が行われたりして、北方領土が平和条件において解決されるべき領土問題の対象であることを確認し合い、少しずつではありますが、解決に向かっていきます。でも、まだまだ問題もあり、難しいようです。

今日見たビデオを通して自由訪問ができるようになったり、北海道ではロシア人との交流が続けられてきたことを知りました。1998年モスクワ宣言によって自由訪問が実施できるようになり、2000年から2005年までに、1919人が生まれ育った故郷へ帰ることができました。数十年ぶりの帰郷に、うれしいけれど複雑な気持ちがあったと思います。元は自分が生まれ育った島なのに、今はロシア人が住んでいるということ、島に行けば、自分はお客さんで、ロシア人によって迎えられるということ。私たちにはとうてい理解できないような複雑な思いをもっておられる思います。自分たちの故郷がロシア領になっているな

んで、本当にひどいことだと思えます。

私の願いももちろん、一日も早く北方領土全てを日本に返してほしいと思っています。一時は、二島だけ返還すると言っていたこともあったようですが、もし二島だけ返還してもらったとしても、解決したとは言えないと思います。四島全てを返還されたときに初めて、北方領土問題が解決したと言えると思います。

去年の2006年で日ソ共同宣言署名から50年が経ちました。日本政府は引き続き、北方領土問題の進展があるようにロシアと交渉していきます。

でもこの問題は、政府だけで解決できることではないと思います。国民一人ひとりの理解と協力が必要だと思っています。私のように北方領土問題があることは知っていたけど、そこまで詳しいことは知らなかったという人が他にもいると思うし、全くそんなこと知らなかった、興味が無いという人もいます。でも、それではいけないということを改めて思いました。この問題に深く関わっている人だけが、どんなに返還を求めて運動を起こしたとしても、人数は限られてくるし、62年経った今、実際に強制退去させられたことを知っている人たちは、高齢になってきています。だから、若い人たちをはじめ、たくさんの方の協力が必要だと私は思います。これは、北方領土に住んでいた人たちやその家族だけの問題ではなくて、日本全体の問題だと思うので、みんながこの事実を知り、日本国民の総意をますます強固なものとし、このことを明確に表明し続けることが、北方領土問題解決への第一歩だと思っています。

## 優秀賞（京都新聞社賞）

### 北方領土を国際交流の場に

京都市立嵯峨中学校

二年 山本 理沙

北方領土と呼ばれる択捉島、国後島、色丹島、歯舞諸島の四島は、一九四五年にソ連に不法占拠され、当時住んでいた日本人が強制退去となった状況がソ連崩壊後の現在も続いている。

北方領土返還運動は、戦後からまもなくして始まったとされている。日本は北方領土に関する国際的な取り決めから見ても、今まで一度も外国の領土となったことがないという理由で返還を強く求めている。一方ロシアも日本と同じく、強く自国の領土であることを主張しているため、交渉は平行線をたどっている。

しかし、もし今の状態のまま、日本に返還できたとしても、現在住んでいるロシアの人々を、むかしソ連が日本人々にしたように、北方領土から追い出すことになり、ロシアとの仲は、ますます悪くなるばかりだと私は思う。そこで私は、国際連合に仲介を頼み、北方領土を日本・

ロシア共同の持ち物とすることを約束すれば良いのではないかと考えた。そうすれば、ロシアとの関係を保ったまま、北方領土問題を解決することができ、一石二鳥である。また、共同の持ち物とすると、問題が起きてしまうような、資源や漁業水域などは、どんな場合でも二国で平等に二分するということになっておけば良いと思う。

すると、お互いの国の独自の文化などを北方領土を通じて知ることができ、交流を深めることができると思う。現在日本では、韓国やアメリカ、遠く離れたヨーロッパの国々の文化（言語、生活など）まで広まってきているにもかかわらず、ロシアの文化はあまり知られていない。そこで、北方領土を共同の持ち物とすることで、交流が深まり、更には日本の発展にもつながるのではないだろうか。

このようにして、北方領土を国際交流の場として活用するなど、いち早く今の状態を抜け出して、有効に利用していくべきだと私は思う。

## 優秀賞（京都新聞社賞）

### 北方領土に対する高校生の意識

京都府立鳥羽高等学校  
三年 秦 秀平

「はるか遠い北方の島々で、日本とロシアが領有権を争っている」これが、私を含む多くの日本の高校生の北方領土問題に対する意識だろう。なかには、齒舞、色丹、国後、択捉の位置関係すら知らない高校生もいるのではないか。これは、無知から引き起こされた無関心によるものだ。少しでも、北方領土について知れば、北方四島が日本の固有の領土であるということは疑う余地のない事実であり、ロシアによる占拠は不条理なものであるということもすぐに分かる。日本国民全体が、この事実に関心を持たなければ、北方領土問題は解決しない。特に次世代を担う高校生が、北方四島は日本の固有の領土であるという事実を学び、確固とした意識を持たなければならぬ。

しかし、多くの人々とりわけ十代や二十代の若い世代が、そのような意識を持つには、何らかのきっかけや動機づけが必要になるのだろう。残念ながら、現代の若者は、国や領土に対する関心を持つことを格好良いと思っていない。こんな状況の中で、仮に北方領土が返還されたとしても、もともと興味がないので、「へえ、そうなんだ」という程度に終わってしまう。

今は、北方領土問題を意識する人々が多く存在しているので、まだ良い。しかし、これから二十年、三十年が経った時、現在の若者が中心となつて日本を担っていくことになる。はたしてその時に、北方領土問題が、現在のように

意識されているだろうか。日本とロシアのどちらの領土でも良いのではという意識が根づいてしまったとき、北方領土問題は最悪の形で終結してしまう恐れがある。

だからといって、今将来のことを心配して、手段を選ばずにロシアと争って北方領土問題をなにかなんでも強引に解決すべきだとも思わない。問題の解決が難しい今、優先すべきはロシアとの友好だと思う。その友好とは、国や政府のレベルの友好だけではなく、国民としてあるいは人としての友好である。両国の国民が、文化や言葉の壁を乗り越え、本気で友好関係を持とうとする意識と意志を持つことだ。その意識と意志が強ければ強いほど、そのために乗り越えるべき課題として北方領土問題が、より強く浮かび上がってくるに違いない。日本とロシアの両国民の多くが、互いが必要な存在として認め、友好関係を築こうとしたとき、北方領土問題を解決しようとする双方の合意ができ、解決の道が拓かれるのではないかと思う。互いが自国の利益追求だけを主張する交渉では、いつまでたつても決着がつかないように思う。

現代の高校生が、日本という国のことや領土のことを意識するためにも、多くの国々との交流を体験する必要があると思う。そうした交流の一つとして、ロシアの交流を進めることにより、乗り越えるべき問題として北方領土に関心を持ち、それを契機として北方領土問題を学び、意識を高めることができると思う。樂觀的な考え方といわれるかもしれないが、多くの高校生がそんな考え方を持つことができれば、近い将来に北方領土問題が日本とロシアが互いに納得のいく形で解決する基盤ができるのではないか。

## 優秀賞（KBS京都賞）

### 未来志向で北方領土問題の解決を

城陽市立東城陽中学校

二年 金井 せりえ

第二次世界大戦後六十年余りが経っても解決されない北方領土問題は、日本とロシアの将来にかかわる重大な問題です。日本国民が、改めて考えるべき問題であり、解決への取り組みが進まないなかで、さまざまな問題も起こっています。

現在の北方領土は、ロシアに不法占拠されています。終戦直後、当時在住していた日本人の島民は、1万7000人にもいたにもかかわらず、現在は誰一人もいません。それは、島にいたすべての日本人が、強制的に退去させたからです。日本人が退去させられた後には、齒舞群島を除く三島に、1万4000人のロシア人が暮らしています。

また、親潮と黒潮が交わる北方四島の海域は、世界三大漁場の一つであり、ここでは、昆布やサケ等も獲れ、北海道本島と一番遠い択捉島でも144.5kmしか離れていないこともあり、新鮮な魚貝類が日本の市場にも届きます。最近、この漁場をめぐる日本漁船がロシアの警備艇に銃撃される事件が起きました。

北方四島が日本に返還されることは、日本にとって安心して漁業ができることであると同時に、かつて島にいた人々が復帰できることになます。このことは、土地や生活、そして大切な人生までも奪われた多くの人々に、ロシアが

間違いを認めることで、心の安らぎと希望を与えることを意味し、日本とロシアの間に和解と友情が生まれます。日本とロシアの間に本当の友好関係が築かれる出発点になります。

歴史的な事実や国際的な取り決めからみても、「北方領土は、明らかに日本の貴重な財産である」という事実は、あまり国民に知れ渡っていないように感じます。私も、北方領土問題について関心がありませんでしたが、この作文を書くことを通じて、色々と調べていくなかで、私は島を追われた人々の気持ちに気づき、北方四島を取り戻したいと思うようになりました。

現在まで何度も行われてきた日本とロシア会談や歴史の流れで結ばれてきた幾つもの条約が、現実のものとなるように、私達一人一人が協力しなければなりません。そうすれば、北方四島は必ず返還されると信じます。

私は、ロシアに北方領土に対する考え方を変わるように提案したいと思います。それは、ロシアが、北方四島をめぐる過去と現実を受けとめ、より良い両国関係を育てるために、未来志向で北方領土問題を解決する勇気を持つことです。そうすれば、日本とロシアの関係は、世界中の良い見本となり、さらに両国が発展すると考えます。私たちは、北方領土問題をロシアとの友好関係を損なう方向での解決をしてはいけないと思います。日本とロシアの未来に向かって、着実に一歩ずつ解決へと導いていく、このことが、私たちに課せられた未来への課題であると考えます。

## 優秀賞（KBS京都賞）

### 国境線から架け橋へ

南丹市立園部中学校  
二年 日下部 美紀

「北方領土」と聞いて、この日本に住んでいる私たち日本人の中で、何人の人がこの問題に興味をもち真剣に考えようとするのでしょうか？ 正直なところ、半分もいないのでは、と私は思います。実際、私自身もこの問題について興味をもったことも真剣に考えたこともなく、ただ、日本とロシアの国境問題だという漠然としたことしか知らなかった私は、先生からこの作文の話を聞いたとき、作文用紙を目の前にして私の「北方領土問題」に対する自分の関心の低さに驚き、情けなく思いました。

私たちと同じ日本人の中には北方四島の返還を望み、積極的に取り組んでいる人たちもいますが、その人たちにこの問題を任せきりにし、私を含め他の人たちがこの問題について関心がなさ過ぎると感じました。もつと多くの人が「北方領土」について知り、考え、関心をもつことが大切だと思い、私がまずはこれを機会に「北方領土問題」について調べてみることにしました。

調べてみると、四島の内の二島である歯舞諸島と色丹島は、日本に返還することが認められていたことを知りました。そして、四島返還以外の解決策として、今ロシアとの間で四つの解決策が具体的に挙げられていることも知りました。「二島返還論」、「三島返還論」、「共同統治論」、「面

積二等分論」、この四つは全て、日本にもロシアにも不公平なく考えられています。

私がこの四つの解決策として実現してほしいと考えているのは、「共同統治論」です。これは、択捉・国後の両島を日露で共同統治するというものです。二つの国が一つの場所を治めるのは、すごく大変で、簡単にできることではないけれど、実現すればすごくうれしいなと思います。北方四島に住んでいるロシア人も家を失わなくてもいいし、日本人は問題なく島へ行け、ロシア人も交流を深めることができる。・・「北方四島」がロシアとの国境線ではなく、ロシアと日本をつなぐ島になれば私はすごくうれしいし、難しくてでもこれを実現できれば日本のためにもロシアのためにもいいと思います。

北方四島一帯は、開発が遅れたため、絶滅、あるいはその危険性が高い生物の、一種の「聖域」状態になっているので、ロシアと日本でお互いにこの貴重な生態系を守っていけることができればいいなと思います。

最初は北方領土について何も知らなかったけど、調べてみるとたくさんを知ることができました。難しいからと、普段から興味を示さない人もたくさんいると思いますが、この日本が抱えている問題として、私たちが自分から興味をもち関心をもつていくことが「北方領土問題」の解決への近道だと思います。

一日も早く「北方四島」が日本とロシアをつなぐ島になることを願い、私は私にできることをやっていきたいと思っています。

## 佳作

### 北方領土の歩んできた道

京都市立藤森中学校

三年 河崎 かれん

どの国も自分の国の領土を広く持ちたがるものだ。いずれの国もそのように主張し合ったら、国際的に問題になる。その一例が、北方領土問題である。

第二次世界大戦後、現在まで、北方四島はロシアに占領されている。日本は自分たちの領土として、その返還を求めている。現在、関係者に対しては、ビザ（許可書）なしの渡航が一部認められている。

北方領土の島々（歯舞・色丹・国後・択捉）は、江戸時代から日本人が一生懸命開拓し、それ以来、ずっと日本人が住み続けてきたところである。しかしながら、今、島で暮らしているのは、日本人ではなく、ロシアの人たちである。戦争（第二次世界大戦）が終わってすぐのところ、ロシア（当時のソ連）が力づくで北方領土の島々を占領してしまった。このため、その時島で暮らしていた人たちは、皆、自分の家や財産をすべて取られ、島から追い出されてしまった。

最近では、島で暮らすロシア人も、日本からの訪問団を受け入れたり、自分たちも日本を訪れるなど、ロシア人と日本人の交流が始まっている。こうした交流が進むことで、北方領土問題の解決につながる事が望まれている。毎年、二月七日は「北方領土の日」であり、北方領土問題について日本人皆が正しく理解することが期待されている。北方領土の返還を求めて、署名運動も熱心に行われており、二〇〇七年三月末現在、七九三〇万人を超えているらしい。今後、北方領土の返還が実現するよう、国会を中心にいろいろな運動が続けられていけばと思う。

私たちも、社会の授業でたとえば「二〇〇海里」問題について学んだ。領土の問題はこの国にとっても重大なことであり、お互いに譲れないことは私にも分かる。問題の起こっている地域に住んでいないからといって、見過ごすのではなく、身近な問題として考えてみたい。長い歴史を持つ問題ならば、それだけ長く話し合いをしていく必要があるであろう。若い私たちが真剣に取り組んでいけば、やがて良い方向に進むような気がする。領土が日本に返還されることを願っている。

## 佳作

### 北方領土について思うこと

京都市立弥栄中学校

二年 岸 愛

「国(くに)」「という漢字と「後(うしろ)」という漢字をあわせて「国後(くなしり)」と読むことを知ったのは、中学一年の社会科の授業の時でした。国後島のほかにも「歯舞群島」「色丹島」「択捉島」といった島の読み方を学ぶとともに、四つの島を北方領土と呼ぶことも学習しました。でも、その時は「難しい読み方だなあ」と思った程度で特に強い関心はありませんでした。なぜならば、北方領土と関わりのある知り合いなど誰もいませんし、旅行会社のパンフレットでも見たことがなかったからです。

二年生になり、北方領土を詳しく学ぶ時間がありました。ビデオやパンフレットを利用して、地理的な特徴や歴史的な経緯などを学んだのです。元島民の皆さんのお話もありました。その時、私は北方領土がこんなにも奥の深いものであるということを知りました。そして、この問題は決して私と無関係ではなく、それどころか、すべての日本人にとって、とても重要な問題であるということが理解できたのです。特に未来を築いていく若者にとっては、自分たちの手で解決するという決意をもつべき課題であると思います。

学習の中で私がまず感じたことは憤りでした。太平洋戦

争が終わったにもかかわらず、北方領土に攻め込んできたソ連軍。逃げまどう島民達。長期間にわたる不当な占拠。こんなに不当なことなのに、日本を本気で支えてくれない国際社会。どれもこれも腹立たしいことばかりでした。では、どうすれば解決できるのでしょうか。果たして解決の道筋は存在するのでしょうか。

私がここで考えたことは、日本は大きくて温かな心を持たねばならないということです。ソ連は北方領土に住んでいた日本人に銃を突きつけて追い出しました。今、北方領土には多くのロシア人が住んでいます。北方領土が返還された時、この人達はいったいどこに行けばよいのでしょうか。確かにそれはロシアの国内問題で、私たちが心配すべきことではないかもしれません。しかし、現在北方領土に住んでおられる人たちのことも含めて考えることが、北方領土返還の力ぎを握っているような気がしてなりません。つまり、北方領土の日本への返還を支持されるような政策を考えていくことが、今求められていると思うのです。

そして、私には夢があります。それは、この北方領土問題の解決が、世界平和に向けての羅針盤になるのではないかとということです。今、世界のあちこちで領土問題を原因とする武力紛争が起こっています。平和的で友好的な方法によって北方領土問題を解決することができれば、それは全人類の模範となるに違いありません。私は世界平和に貢献するためにも、北方領土問題を円満に解決する道を考え続けたいと決意しています。

## 佳作

### 北方領土について

京都市立高雄中学校

一年 山本 涼加

私が今、北方領土について一番に考えなくてはならないのは、領土についてではなく、北方領土に住んでいる人々のことだと思う。

今、中立的な立場として、北方領土について考えるのは難しい。日本では日本よりの考え、ロシアではロシアよりの考えになっていると思うからだ、それでは、私なりに日本とロシアの立場になってみようと思う。

まずは日本の立場になって考えてみる。

ロシアは、ぼう大な土地があるにもかかわらず、なぜ土地を未だに返さないのだろうか。自然が豊かで、魚も良くとれるとても良い土地とはいえ、ソ連軍が進入し、最終的には北方領土の全てを占領した。今ではビザ無しに四つの島に行くことが出来る。だが、先日の出来事を皆さんは知っているだろうか。誤って日本の漁船がロシアの海域に入ってしまった。乗船していたうちの一人が亡くなったという出来事だ。

こういう出来事から考え、双方が納得する形での北方領土返還をいち早くしてほしい。

それでは次に、ロシアの立場から考えてみる。

今、返してくれと言われてもロシアはロシアで他にしなければならぬことがあると思う。日本が政治の問題を全て同時解決できないように、ロシアも数多くの問題を抱えているのではないだろうか。それに、今行動に移したところで、すぐには北方領土が返せるわけではないので、先延ばしになっているのだと思う。第一に、今北方領土に住んでいる人はどうなるのだろうか。もし今、過去に日本がされたように、出て行けといって、ロシアの人々を追い出すのは、過去の日本の二の舞になるのではないだろうか。

こう考えると、ロシアもロシアなりに、日本は日本なりに言い分があるということがわかる。

私はこの北方領土問題を解決するために、中立的な意見と話し合いが大切だと思う。でも、早く解決させて、あいまいな答えでもいけないし、ゆつくりするほどの時間もない。今、一刻も早く的確な対応と、ロシア・日本両国民一人一人の理解、納得できる答えが求められている。

## 佳作

### ゼロからのスタート

京都市立深草中学校

一年 永井 智大

「北海道の北東にある島は？」と尋ねると「エトロフ島」と答える人が多いだろう。だが、「漢字で書くと」と聞くと正しく書ける人は少なくなってくる。それほど日本の国であるという認識が薄い日本人が多いのではないだろうか。なぜ、このように忘れられてしまったのか疑問に思う。

六十年前。私たちの先祖が開拓をして、つくりあげた日本の島だった。豊かな自然の中で漁業を中心に活気あふれた島々であった。だが終戦後、住んでいた人々はソ連の不法占拠で瞬く間に、日本人が住めなくなり、北方領土は占領されてしまった。今ではソ連が崩壊し、ロシアが占領している。日本は返還を求めているが、されないままである。日本は外国と平和条約を結び、いち早く北方領土返還を求めている。それが北方領土問題である。

ところが北方領土問題を身近に感じている人は、そういない。なぜならば、こういうことがあまり知られていない

からだ。僕もこういう北方領土を知る機会がなければ、知らないままだったかもしれないと思う。

今、国民に知ってもらおうべく、二月七日を「北方領土の日」にしたり、また、「ビザ無し」で北方四島に訪問できるなど、日本とロシアの考え方を理解し合う活動が行われている。

そうして、日本国民の心の中に忘れられない島々となるよう関心を深めて北方領土返還へ進めばいいと思う。

現在では、まだまだだが、今、ゼロからスタートできるチャンスだと思う。今、北方四島は二つの国の故郷として成り立っている。今後、日本とロシア、二つの国の「故郷」として両国民が住める島になれるのではないかと僕は思う。戦争以前は、日本人とアイヌ人はともに暮らしていた。そのように、いつか違う民族との共存が出来るのではないかと思う。このようなことは、世界の中ではあまり無いことだと思いが、共存できる日が来れば、国と国の関係を深めながら暮らしていけると思う。

戦争で失ったものは大きいし、それを取り戻そうとするには、とても長い時間がかかることを教えてくれるかのような北方領土問題。一日も早く友好的な関係を築いていかなければならないと、いまはものすごく感じる。

佳作

## 北方領土と私たち

京都市立塔南高等学校

二年 高橋 沙也理

北方領土、私たちがそう呼ぶのは、齒舞諸島、色丹島、国後島、択捉島の四島。

日本がロシアに返還を求めている四つの島々で、現在不法に占拠されているが、北方領土はいまだかつて一度も外国の領土となったことのない日本固有の領土です。

北方領土に人が住みだしたのは、各地の遺跡などからみて数千年前からと考えられている。北方領土に住んでいたアイヌの人々は江戸時代の初め頃から松前藩と交流を始めた。その後、南下するロシア勢力の勢いが強くなったため幕府は北方領土を直轄地にし、漁場や陸路、海路を開き、島々を開拓した。南下を続けるロシアとは一八五五年（安政元年）に下田で「日露通交条約」を結び、その結果、択捉島から南の島々は日本の領土に、ウルップ島から北の島々はロシアの領土になった。明治時代になり、北方領土の開拓がいつそう進むと人口も増え、大正時代の終わりには町村制も整えられている。第二次世界大戦終了時、北方領土には二万人近い日本人が暮らしていた。このように、北方領土が外国の領土であったことはなく、このため「北方領土は日本固有の領土」と言われるのです。

現在、北方領土問題が起きている。今ではロシアの実効支配にあることから、我が国は外交交渉を通じてこの問題を解決し、日露平和条約を締結して両国間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立することを基本方針としている。

北方領土を取り戻すためには私たちは何をすればよいのか。

ルール違反の占領を続けているロシアから、北方領土の島々を取り戻すためには、日本政府とロシア政府がしっかりと話し合いをしなければならぬ。こうした話し合いを支えるのが私達、みんなの力強い声である。みんなが北方領土のことを勉強して、たくさんの人々が、北方領土返還の運動に加わり、ねばり強くうたったことが大切である。日本とロシアの話し合いは、これまでに何回も行われている。総理たちの間で、北方領土問題を早く解決しようとお互いの考えを確認し合っているのだ。

こうやって日本のみんなの声があるからこそ、ロシアにも、堂々と日本の立場を主張できるのだと思う。こうした話し合いを支えるためには、国民みんなの一致した世論と力強い支持が重要だと思う。

署名運動や北方領土研修会などに参加したり、北方領土の勉強をして、この問題を正しく理解し、この運動を盛り上げていくことが大切だと私は思いました。

## 佳作

### わかり合おう北方領土

城陽市立城陽中学校

三年 大倉 萌

日本は今、ロシアに対して北方領土（択捉・歯舞・色丹・国後・）の返還を求めています。サンフランシスコ平和条約の内容に対して、ロシアと領土の所有権を争っています。内容的に、北方四島は日本の領土ですが、ロシアが所有権を主張して、勝手に国民を移住させてしまっています。ロシアとの間には、1956年に日ソ共同宣言を発表しています。しかし、このとき日本もロシアも、北方領土についての宣言は出しませんでした。そのため、今でも領土争いが続いているのです。

今の状況では、いち早くロシアと話し合いを進め、お互いに悪いところを認め合わなければならぬと思います。その上で、日本は「北方領土は、わが国の領土だ！」と主張する必要があると思います。

しかし、日本はどこか、ロシアという国を受け入れていない部分があると思います。日本は、どちらかというところロシアの文化などをあまり知りません。なので、もっと積極

的にロシアの文化を詳しく知ることが必要だと思っています。そして、ロシアにももっとよい部分を知ってもらい、お互いにお互いの文化を知り、認め合って話し合いを進めていかななくてはならないと思います。

ただ単に、日本も「北方領土は、わが国の領土だ！」ではなくて、もっとロシアとの間に交流を深めなくてはならないと思います。そのために、お互いの国の文化を知ることとても大切であるし、交換留学をしたりと、どんどん国交を深めていくべきだと思います。国同士が支え合い、称え合い、伸ばし合うのが、よりよい関係だと、私は思います。その上で、話し合いを進めていき、きつぱりと「日本の領土だ！」と言いきり、日ソ共同宣言ではなく、お互いを高め合えるような条約を結び、よりよい国交を結んでほしいです。

## 佳作

心で国が交流できる日を願って

向日市立西ノ岡中学校

一年 一ノ瀬 麻依

第二次世界大戦の代償として、旧ソ連（現在のロシア）に占領されてしまった日本固有の四つの島々である北方領土が、未だ返還されないのはとても悲しく残念なことです。現在では、もともと北方領土に暮らしていた人たちが返還を求め、一年に数回交流できる程度だそうです。

そもそも北方領土をソ連が占領し始めたのは、終戦後の八月十八日からだったそうです。そこで私は、なぜ日本が降伏し「日ソ中立条約」があつたにもかかわらず、ソ連が攻撃を開始したのかと言うことが全く理解できません。当時は多くの日本人が生活している日本の領土であつたというのに、故郷を命からがら脱出したり、ソ連に抑留されてそこで強制労働を強いられ苦しく辛い生活を送らなければならなかつたのは、とても理不尽であり気の毒でなりません。

また、以前北方領土に住んでいた人たちも、今では高齢になられ、自分の生まれ育った故郷へ戻りたい、訪れたいという思いが日に日に強くなってきておられると思います。

す。中には先祖の墓参りもできず、故郷の思いを胸に秘め亡くなつてしまわれた方もいらっしゃるようです。

現在、年に一度北方領土の日があります。これを機会にもっとこの島々の歴史をみんなで知り、アメリカ力が沖繩を返還したようにロシアにも政治的な力だけでなく、日本人とロシア人の心と心の交流により、わだかまりが解ける方向へ持つて行かなければならないと思います。今すぐ返還されなくても、私たち日本人が北方領土へ自由に行き来でき、漁の規制も緩和されることを願います。

北方領土の返還についての問題は、核廃絶の問題とともに私たち若い世代がこれからできる限り力となつて真剣に考え、実現させていかなければならない大きな課題であり、決して風化させてはならない大切な問題だと思います。そのためには、お互いが自国の考えだけを主張しては決して解決せず、ますますこじれてしまうような気がします。お互いの意見を交換し合い、そこに住んでいらつしやつた方の笑顔を取り戻せるよう早期解決に向けて話し合いを進めてもらいたいと思います。同じ地球に住んでいる人間同士がいがみ合つて生きているより、仲よく交流できる国同士になるためにも・・・

## 佳作

### 北方領土を考えて

亀岡市立大成中学校

二年 下岡 拓矢

僕は、なるべく早くに北方領土が日本に返還されたいと思う。なぜならば、昔はそこに日本人が住んでいて日本固有の領土だったからです。

僕は、北方領土について調べて次のようなことがわかった。北方領土は、齒舞諸島・色丹島・国後島・択捉島から成り立っていること。第二次世界大戦後にソ連に占領されていること。現在では、ビザなしでの交流も始まっていること。日本人の元島民と現島民との相互訪問が行われていること。一九五六年（昭和三十一年）の日ソ共同宣言で、平和条約締結後に日本に引き渡すことが決められていることなどがわかった。

僕は、元島民と現島民の交流について良いことだと思う。このまま北方領土が日本に返還されるだけではいけないと思う。北方領土が、日本とロシアのかけはしになればいいと思った。そうすれば、両国の文化の良さなどがわかるは

ずだ。北方領土の返還だけでこの問題を終わらせず、その後も交流することが大切だと思う。交流を通じて日本とロシアの絆が深まり、お互いに助け合えるような国関係になればいいと思う。このことは、日本とロシアだけでなく全ての国に言えることだ。世界では、戦争がおこり多くの人が苦しんでいる。武力で問題を解決しようとせず、お互いの国を尊重する心が必要だ。日本とロシアとの架け橋が世界に広まり、まるで世界が一つの国になるようになることが大切だと思った。この北方領土問題は、一人一人がしっかりと考えるべき問題だ。そしてこの問題は、僕たちにとって大切しなければならないヒントがある。問題の解決には、まだまだ時間がかかるかもしれない。しかし、両国が納得できて解決してほしい。そしてこの問題をしっかりと考え、決してこの問題を放置してはいけない。解決に向けて全力でがんばってほしい。

## 佳作

### 北方領土について学んだこと

京丹波町立蒲生野中学校

三年 河崎 愛実

私は、今まで北方領土についてほとんど何も知りませんでした。社会科の授業で少し勉強したことがあるけれど、四つの島の名前を覚えるぐらいであまりくわしくは知りませんでした。正直言つて、私とは直接関係のないことであり、今は日本は平和だから別に問題はないのでは、と思つていました。

しかし、先生に見せていただいた北方領土のビデオなどで、前よりもくわしいことがわかりました。ビデオの中では、北方領土に住んでいるロシア人に「北方領土についてどう思っているか。」聞くと、やはり「ここは自分たちの国だ。」と言っていました。でもただ単にそう言っているのではなく、理由がいくつもありました。でもそれは私たち日本人が考えていることとは大きく食い違っていました。私はその話を聞いた時、私たち日本人は自分たちが思っていることだけが正しいと思つているけれど、ロシアの人たちが言っていることもしつかり受け止め、どちらの国の人でも納得する方法を考える必要があると思いました。

ところで私は、『なるほど なつとく 北方領土』を読んで初めて知ったことがいくつもありました。

まず一つ目は、動物についてです。私の想像では、北方領土はあまり動物もいなくてとても寒いというイメージが

ありました。でもたくさん野生の動物がいると知つて大変驚きました。また、私たちの周りではめずらしい鳥もたくさんいると知つて、一度行つてみたいなあと思いました。

二つ目は、食べ物についてです。私は、北方領土は北海道に近いので、北海道の沿岸で捕れる魚などがいて、京都よりけつこう新鮮でおいしいものを食べる事ができると思つていました。私の予想通り、北方領土沿岸の海では、サケやマス、ホタテなどがたくさん捕れるようです。もし北方領土へ行く機会があつたら、私もぜひ捕れたてのそれらを食べてみたいです。

三つ目は、気候についてです。気候もやっぱり北海道に近いのでとても寒いと思つていたけれど、実は違うと言うことがわかりました。夏はあまり気温が高くなく、一番暑い八月でも平均気温は十六度だそうです。冬はそんなに寒くなく、北海道の内陸部より気温が高く雪も少ないと言うことがわかりました。私が今住んでいるところも、冬は結構寒いし夏はとても暑くなるので、北方領土の方がいいかなあと思いました。

最後は、環境についてです。初めて北方領土にある建物を見たとき、壊れて使えなくなつた建物がたくさん残されていることに驚きました。解体するのに費用がかかるので、そのままにしているところが多いようです。

今回、北方領土についてくわしく学習して、いろいろなことを知ることができました。私はこれからもっと日本とロシアが友好を深めて、お互いに助け合いながら、平和的にこの問題が解決できることを願います。

## 佳作

### 「考える」という連鎖反応

宮津市立養老中学校  
三年 土井 彩哉香

北方領土問題。一口で言っても様々な問題が四島を埋め尽くしている。考えもつかない深い深い問題を目の当たりにする。

まず、北方領土問題はロシアと日本の交友関係に著しく反映しているわけではない。だからこそ、あからさまな事例になることもないのではないだろうか。そもそもなぜ北方領土問題は長い年月を経た今でも未解決なのだろう。確かに、難しく複雑だと言うことはわかっている。しかし本当に解決したいと思っているのなら、なぜ具体的な解決策が生まれないのか。なぜもつと盛んに行動しないのだろう。私は北方領土をどう言うよりも、まず一人一人が解決への糸口を探すことが大切なのではないかと考える。

また、私は興味深い資料を目にした。「北方領土周辺水域における被拿捕状況」。だんだんと数は減少傾向にあるものの、驚きを隠せない数字な並んでいる。昭和三十年から三十九年の間の拿捕数は、なんと「三千五百七十六」。これほどの数が拿捕されていた年があったなんて、まだ信じられないというのが本音である。しかし、未だに拿捕問題も完全に解決したわけではないのだ。これは漁業をする人たちにとってもとても困る問題だ。

こういう問題は国が責任を持って解決にあたらなければならぬのに・・・とても大きな憤りを感じた。

外務政務官であつた新藤義考衆議院議員は言っている。「日露関係をさらに発展させるには、北方領土問題の解決が不可欠ですが、そのためにも政治・経済・文化等の交流を深め、両国国民が直接ふれあいお互いを理解し合うことが何よりも有効です。」

と。現在ロシアと日本は隣国として新しく豊かな友好関係を創り出すためにたくさんの方で協力関係を推し進めている。そのために、やはり北方領土問題は解決すべきだと私は思う。

しかし、日本の言い分だけをロシアに押しつけるのではなく、ロシアの立場にも立ち、お互いを尊重し解決することが一番ではないだろうか。

北方領土問題。日常でこの問題に接している人が少ないため、北方領土問題について考える機会も人も少ないのが現状である。北方領土問題をもつと公の問題として、日本人にもつと知ってもらい、考えてもらい、行動してもらい、ということが大切であり、解決への近道になるかもしれない。

一人の考えが点となり、また一人の考えが点となり、その点をつなぐと線になる。日本の皆さんの点が一本でつながれば解決への大きな一歩となる。考えてみてほしい。北方領土問題。まずは考えてみることから始めてみようではないか。そしてその連鎖反応がロシアと日本の未来を輝かせるだろう。

## 佳作

### 北方領土問題について

京都府立洛北高等学校

二年 竹中 朝美

北方領土問題について、私はほとんどいい程知らなかった。知っていることと言えば、北方領土のある程度の場所と日本とロシアの間の問題であるということぐらいで、後は、北方領土とは歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島のことだというくらいだった。なので、疑問に思った点から北方領土について考えていこうと思う。

まず、現在は誰が住んでいるのかという点について。私はずっと、北方領土には日本人が住んでいるものだと思っていた。しかし、実際住んでいるのはロシアの人ばかりらしい。私はとても驚いた。なぜなら、まだ解決していない問題であるのに、ロシアの人は住むことが許されて、日本人は住むどころか入ることも難しい状態にあることに違和感を感じたからだ。日本人ばかりが住めばよいとかではなく、どちらもが上手く住めたらと私は思う。そのようなことができれば、こんなに深刻な問題になつていないと思うが。

そもそも、なぜこんなにも北方領土問題が重要になるの

か、ということを考えようと思う。北方領土周辺は、暖流と寒流が交わっているとても良い漁場であることや、国の領土や領海を得ることによって天然資源を得ようとするのが考えられる。日本が、ロシアからの返還を強く訴えるのもよくわかる気がする。

それでは、どのようにすれば、北方領土は日本に返還されるのか。それはもちろん日本政府とロシア政府の話し合いによつて問題解決されると思うけれど、その話し合いを支えるのは国民の世論や強い支持だと思う。だから、もっと多くの人が北方領土返還の運動に加わり、ねばり強く訴えていくことが大切だと思う。また、2月7日は、「北方領土の日」と定められており、国民みんなに正しく理解してもらおうと呼びかけている。このようなことも多分知っている人も少ないと思うので、多くの人に知ってもらうような工夫も必要ではないかと思った。

日本もロシアもどちらも完全に納得して問題を解決することは難しいと思うけど、そこそこどちらの国も納得して、北方領土の豊かな自然を分け合えれば良いのではないかと思った。今はともかく、多くの人がこの問題に関心を持ち学ぼうとする姿勢が大切なのではないかと思った。

発 行

平成20年(2008年)2月23日

北方領土返還要求京都府民会議

〒601-8325 京都市南区吉祥院八反田町11番地5  
(株)旭洋内

京都府北方領土教育者会議

〒622-0041 京都府南丹市園部町小山東町藤ノ木21  
京都府南丹教育局内